

——まゆしいエンドを、「なかったこと」にしてはいけない——

いくぶんか涼しくなった秋の風が、病院の玄関から外に出た俺の頬を撫でた。

「オカリン、大丈夫？ どこも痛くない？」

俺の隣にびつたりついたまゆりが訊ねてくる。まったく、いつまで経ってもこいつは心配性だな。

「この鳳凰院狂真が、あの程度の怪我でダウンするわけが無かるう!! これも『機関』からの追跡を撤くためなのだ……」

「じゃあ、まゆしいがお世話してあげるときに、痛いって言ったのも嘘だったの？」

俺の腕を取るまゆりが、少しだけ悲しそうな声をする。上目遣いで見上げられながらそんな風にされると、元気になった証として昔のような中二病台詞を吐いてみたことに罪悪感を感じてしまう。

「……いや、いくぶんか真実が含まれていたことも確かだ。まゆり、ありがとうな」

「どういたしまして。なんたって、まゆしいはオカリンの人質から恋人にクラスチェンジしたんだもんね」

判りきったこととはいえ、改めて口にされるとどうにも気恥ずかしくてならない。だが、そんな俺の内心をよそに、まゆりは心の底からの笑顔を浮かべて続ける。

「恋人なんだもん、辛いときにお世話してあげるのは当然だよー」

話をしながら歩いているうちに、病院の隣にある小さな公園

の中に来ていた。入院中はベッドから動けないままずっと眺めていた光景の中に自分が居る違和感が、逆に俺がやっと日常の世界に戻って来れたことを教えてくれる。

俺の腕を放して軽やかに一歩前に出たまゆりが、向き直って俺を見つめる。

「退院おめでどう、オカリン。まゆしいはオカリンが元気になってくれて、とつてもうれいのです」

色づき始めた公園の木々を背に、あの夏より少しだけ厚着をしたまゆりがふんわりと微笑む。変化のない病室の風景に慣れた身には、一ヶ月の入院の間にすっかり秋へ変わってしまった街の風景がとても目新しく感じてしまう。

だが、それはきつと喜ぶべき事だ。救えないことを何度も悔やんだあの夏と少しだけ違うまゆりの姿も、あの繰り返しよりも少しだけ涼しくなった風も、俺が未来へたどり着けたことを教えてくれる。

「まゆり……」

だからきつと、俺は。

「もう、離れないでくれ……」

公園の木々を背に立ち止まって俺を見つめるまゆりに近づき、その小さな身体を抱きしめる。

「うん。オカリンも、まゆしいをずっと捕まえててね」

UPX前で紅莉栖を見送ったときのように、まゆりは俺の胸に顔を埋めてくる。

「幸せに、してください」

「ああ」

「離さないで、いてください」

「ああ」

「ずっと大好きで、いさせてください」

「ああ」

いつかと同じやりとり。だが、紅莉栖を見捨てまゆりを選んだあの時とは違う。

この「シユタインズゲート」では、まゆりと紅莉栖の両方を救うことが出来たのだ。

「それじゃ、帰るぞ。まゆり」

「うん」

抱きしめた身体は離しても、繋いだ手は離さない。俺たちはそのまま、秋葉原駅へと歩き出した。

\*

「悪いな、ダル。このタイムマシンは二人乗りなんだ」

「……ここでその台詞を選ぶオカリンのセンスに僕はうんざりだよ」

「ほえ？　ダルくんも乗りたかったの？」

ほとほと呆れたように首を振るダルと、不思議そうにそんな俺たちを見つめるまゆり。後ろでは鈴羽が無言で俺を待っている。

る。

これからタイムマシンに乗って過去を変えに行くというのに、いつも通りに接してくれるダルとまゆりがありがたかった。まゆりの場合は、そんな難しい事を考えていない気もするが。

「岡部のおじさん、そろそろ行かないと。出発の時間は——から——の間って指定されてるんだ」

ずっと黙っていた鈴羽が厳かに告げる。

あまりにも非現実的なタイムマシンという存在も、冗談の入り込む隙間もないくらいに真剣な鈴羽の様子を見ているうちに真実味を帯びてくるのだから不思議なものだ。

第三次世界大戦。Eとロシアによるタイムマシン開発競争と、その果てにある戦争。

「最後に、もう一度だけ確認させてもらう。あの日に戻って紅莉栖を助ける。これが、まゆりを救うことに繋がるんだな」

「そう。いまのままだと、この世界で一年後に椎名まゆりは死ぬ。それは絶対に避けられない『運命』。岡部のおじさんなら、私の言っている意味が分かるはず」

「まゆしいは、いきなりそんな事を言われると怖くなってしまうのです」

「安心しろ、まゆり。俺がお前を死なせない」

鈴羽のただならぬ表情に、流石のまゆりも眉を曇らせている。

その表情を見て、俺は思わず軽くまゆりを抱き寄せる。ダル